

日本医学会分科会活動報告

一般社団法人日本骨代謝学会
理事長 福本 誠二

I. 医学および医療の水準の向上への貢献が日本医学会分科会にふさわしいと考えられる貴学会の独自の活動を以下に留意して記載をしてください。

a. 特に学術的に重要と考えられるもの

- ・ 癌治療関連骨減少症(CTIBL)診療マニュアル(2020年)
- ・ COVID-19 バンデミック下での提言 骨粗鬆症診療の携わる医療機関の皆様へ(日本骨代謝学会、日本骨粗鬆症学会による提言)(2020年)
- ・ ビタミンD不足・欠乏の判定指針(2017年)
- ・ 骨吸収抑制薬関連顎骨壊死の病態と管理: 顎骨壊死検討委員会ポジションペーパー2016(2016年)

b. 当該領域における国際的な役割

- ・ 当学会の学術集会では、American Society of Bone and Mineral Research (ASBMR), European Calcified Tissue Society (ECTS), Australian & New Zealand Bone and Mineral Society (ANZBMS), Korean Society of Bone and Mineral Research (KSBMR)などと共同シンポジウムを開催、またこれらの学会の年次集会への若手研究者の参加に対し travel award を設定するなど、交流を深めている。
- ・ ASBMR, ECTS, ANZBMS などとともに、International Federation of Musculoskeletal Research Societies (IFMRS)の創設メンバーとして、骨・ミネラル代謝研究の進展に貢献している (<https://www.ifmrs.org/>)。

c. 活動からもたらされる社会的な意義

骨・ミネラル代謝学は基礎医学の全領域と交絡し、歯学、内科学、整形外科学、産婦人科学、口腔外科学、小児科学の臨床領域にまで亘る学際的、横断的、かつ重層的な学問分野である。本会が対象とする分野は、高齢化社会の進展と共に基礎、および臨床の両面で飛躍的な発展を遂げ、「骨の健康」に対する社会的関心が高まっている。

骨芽細胞分化のマスター転写因子 RUNX2、破骨細胞分化因子 RANKL、骨コラーゲン分解酵素カテプシン K など、骨代謝調節に必須の分子の同定は、代謝性骨疾患の重要な治療標的の発見に繋がった。また骨代謝と造血、免疫システムとの関連の解明は、骨免疫学という新たな学問分野を発展させた。さらに骨髄間葉系幹細胞は、iPS 細胞と同等以上に、骨・軟骨、筋肉、神経組織の再生医療の発展に欠かせない細胞であることが示されている。これに加え、骨細胞が産生する FGF23 が腎臓に作用しリン代謝を調節することなど、骨と他臓器との機能連関が明らかにされた。

これらの成果は、骨粗鬆症や指定難病の一つであるビタミン D 抵抗性くる病・骨軟化症の新たな診断法、治療法に結実した。これらの業績の多くが本会から世界に先駆けて発信されており、本会は骨代謝研究をリードする存在であり続けている。さらに本会は、骨粗鬆症の予防と治療ガイドラインや癌治療関連骨減少症(CTIBL)診療マニュアルなどの作成、公表を通し、幅広い骨疾患の診療の進歩に貢献している。

d. 学会運営上留意している点

- ・2016年に一般社団法人化し、運営面・会計面において法的根拠のある団体として組織の基盤を整備している。
- ・倫理委員会および利益相反委員会を設置し、会員における利益相反状態を適切に管理することに努めている。
- ・Young Investigator Committee を設置し、若手研究者の意見を反映させつつ、若手研究者のモチベーションを維持するよう努めている。

II. 日本医学会分科会にふさわしいと考えられる貴学会と他の分科会との連携による活動を記載してください。

日本骨粗鬆症学会との連携

- ・年次学術集会の合同開催
- ・機関誌"Journal of Bone and Mineral Metabolism"の共同編集
- ・ガイドラインの共同作成（骨粗鬆症の予防と治療ガイドライン、顎骨壊死検討委員会ポジションペーパー等）

日本内分泌学会との連携

- ・年次学術集会での合同シンポジウムの開催
- ・ガイドラインの等の共同作成(くる病・骨軟化症の診断マニュアル、ビタミン D 不足・欠乏の判定指針)

日本腎臓学会、日本整形外科との連携

- ・年次学術集会での合同シンポジウムの開催